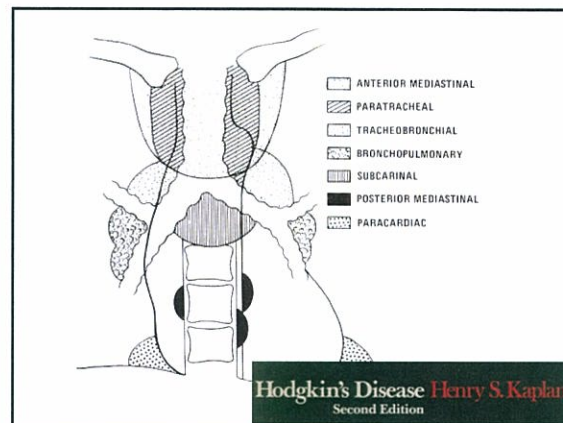
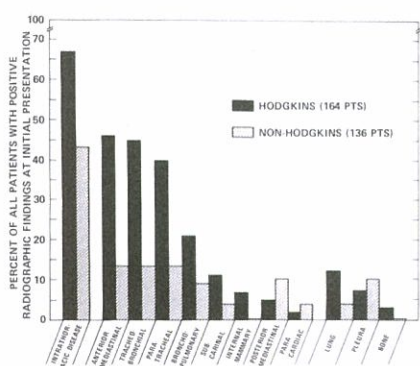


縦隔(リンパ節):病理

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
病理学
吉野 正



Hodgkin's Disease Henry S. Kaplan
Second Edition



縦隔(リンパ節)病変の病理診断:岡山大学148例 (胸線材料も含む、同時期の総数10507例)

悪性リンパ腫	症例数	(%)
非ホジキンリンパ腫	101	68%
ホジキンリンパ腫	47	32%
非悪性リンパ腫	47	32%
胸腺腫、胚細胞腫	12	
癌転移	14	
その他(非腫瘍性)	21	

悪性リンパ腫と非悪性リンパ腫

岡山大学大学院 病理・病態学 ('89-'06)

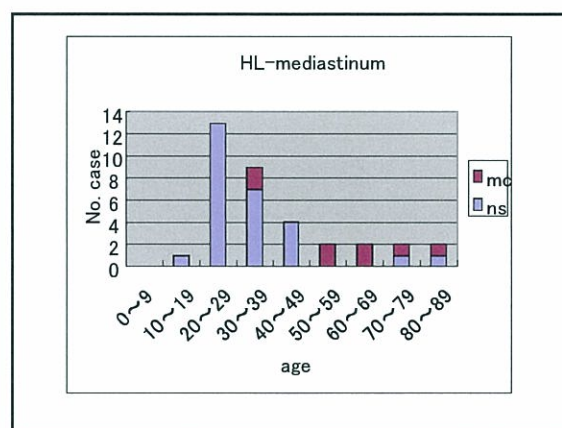
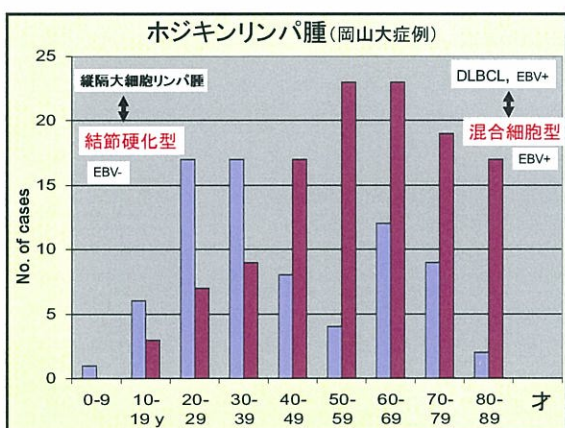
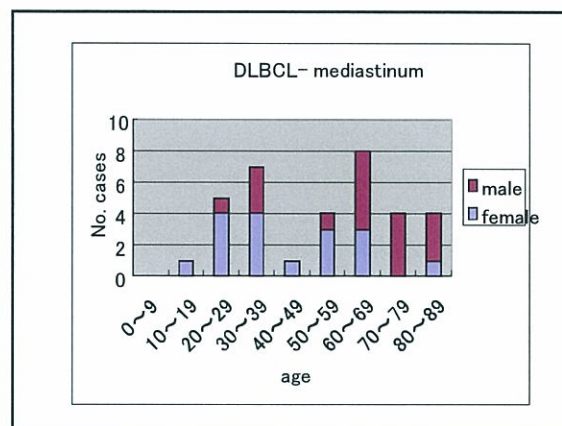
悪性リンパ腫	7291 (69.3%)
非悪性リンパ腫	3216 (30.6%)
計	10507 samples

縦隔(リンパ節)病変:悪性リンパ腫例:101例

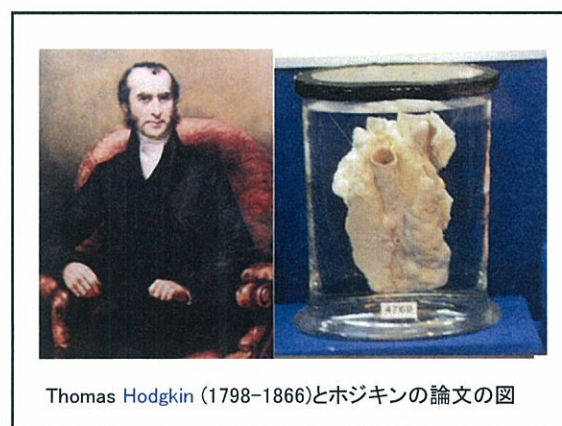
	症例数	男/女	平均年齢
非ホジキンリンパ腫(64例: 63%)			
びまん性大細胞型B細胞	36	17/18	53.1
Tリンパ芽球性	12	8/4	25.1
濾胞性	4	2/2	58.7
MALT	5	3/2	61.0
形質細胞	5	3/2	61.8
その他	2		
ホジキンリンパ腫(37例: 37%)			
結節硬化	29	13/16	32.8
混合細胞	8	6/2	55.9

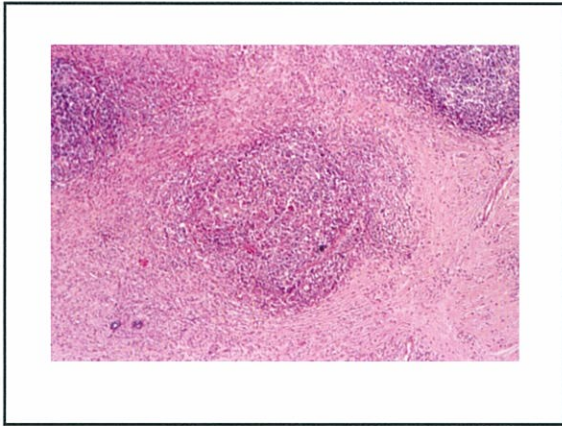
岡山大学病理・病態学 (1989-2006) 計 6052例

分類	節性	節外性	頻度(%)	分類	節性	節外性	頻度(%)
B細胞性	1803	2945	78.5	T細胞性	470	417	14.7
びまん性大細胞	958	1342	38.0	末梢T細胞性	239	143	6.3
濾胞辺縁帯	35	922	15.8	血管免疫芽球	128	6	2.2
濾胞性	547	77	10.3	NK/T細胞、鼻型	2	112	1.9
形質細胞	14	206	3.6	ATL	34	36	1.2
マンテル細胞	79	58	2.3	Anaplastic large	39	19	1.0
リンパ形質細胞	20	39	1.0	皮膚 CD30	0	48	0.8
リンパ芽球	7	48	0.9	リンパ芽球	19	23	0.7
小細胞	30	17	0.8	その他	9	30	0.6
パーキット	7	13	0.3				
Hodgkin	326	2	5.4				
計					2599	3364	100.0

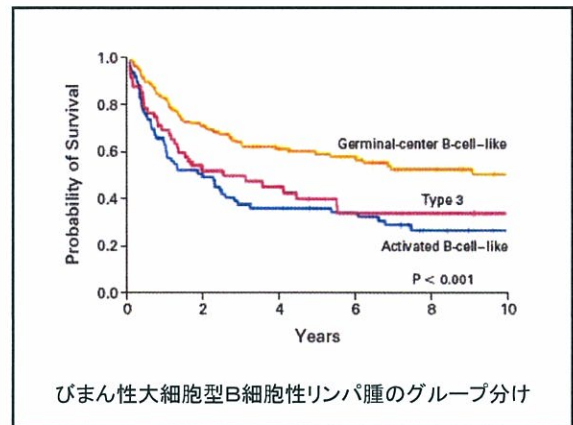
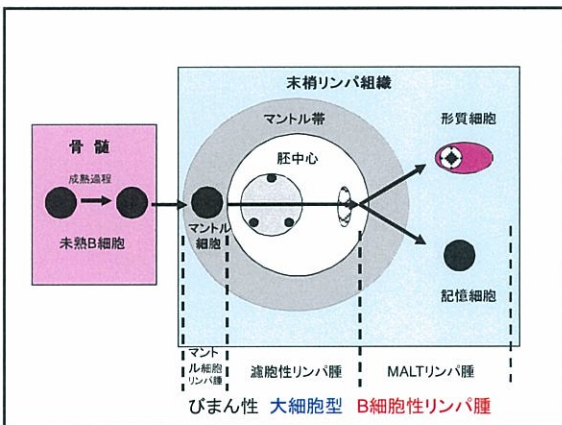
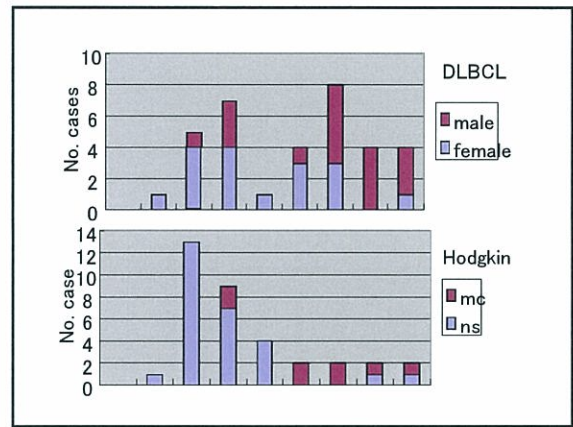
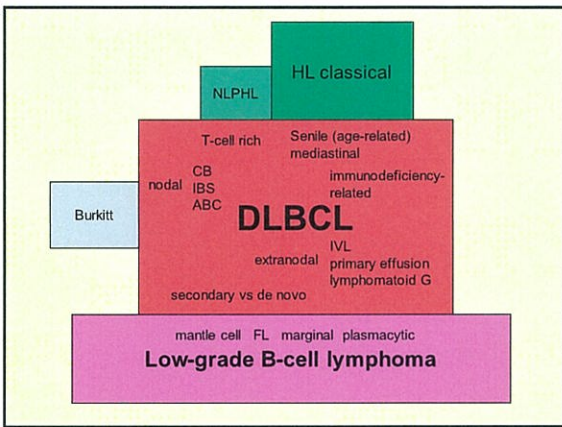


- ホジキンリンパ腫**
- Thomas Hodgkinの報告(1832)に端を発する。
 - **リンパ節(?!)**に発生するリンパ腫
 - 頸部に発生し隣接するリンパ節を順に侵すことが多い。
 - 予後が一般に良好
 - 二峰性の年齢分布を示す

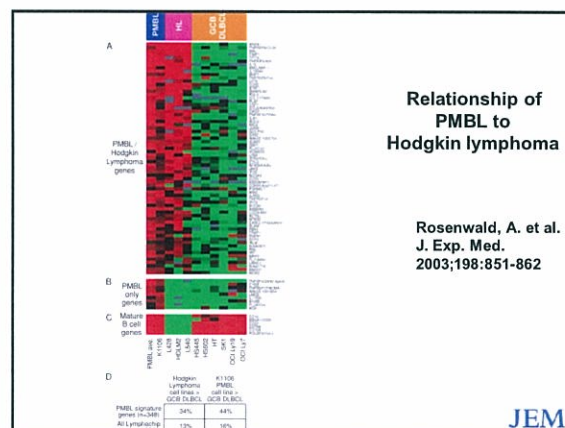
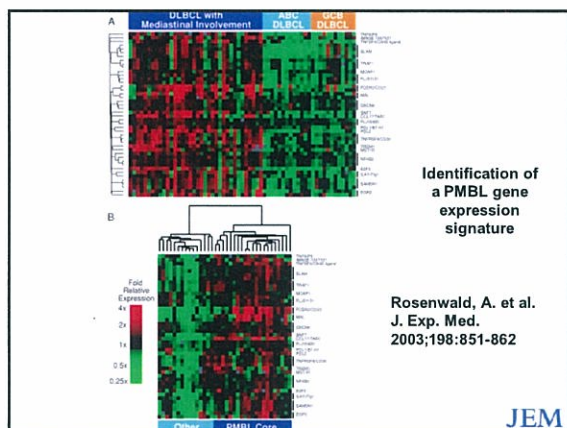




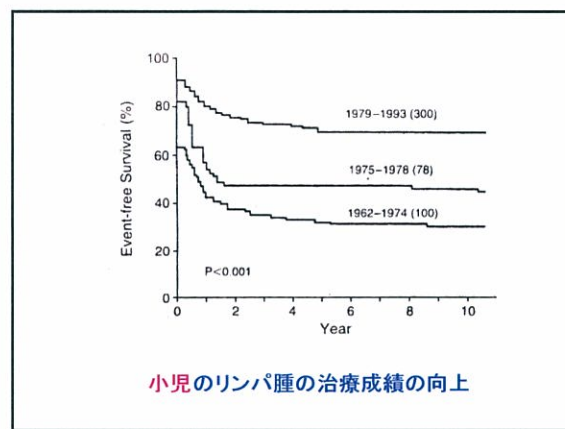
Hodgkin vs DLBCL



びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫のグループ分け



Tリンパ芽球性リンパ腫

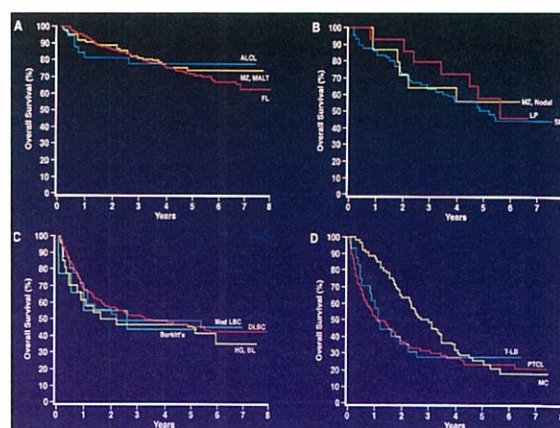
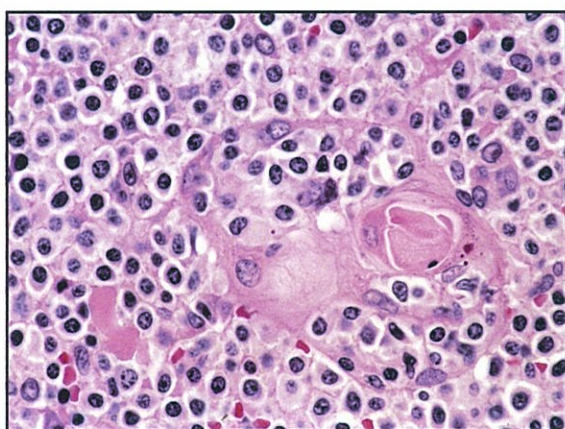
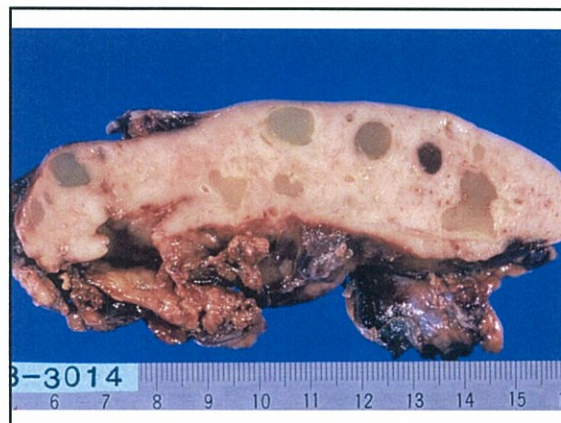


- T-LBLの鑑別**
- Lymphoblastic lymphoma (T cell): T-LBLの半数はCD79a陽性 (J Pathol. 2002 197:341)
 - Granulocytic sarcoma: MPOが重要
 - Burkitt lymphoma: t(8;14), TdT-, CD10+, bcl2-, MIB-1 index > 90%

MALTリンパ腫

胸線MALTリンパ腫

- 成人 (50-60才)
- 女性優位 (M:F=1:3)
- 報告例では60%以上がアジア系
- Sjögren 症候群などの自己免疫疾患との関連が深い
- 自覚症状を欠く
- 単クローン性免疫グロブリン (IgAが多い)



胸腺腫: WHO分類

- Type A (従来spindle; medullary)
- Type AB (従来mixed)
- Type B1 (従来lymphocyte-rich: lymphocytic; organoid; predominately cortical)
- Type B2 (従来cortical)
- Type B3 (従来well-differentiated carcinoma)

胸腺腫: 病期分類 (正岡分類)

- I期 (5生率90-100%)
完全に被膜でおおわれているもの。
- II期 (5生率90-100%)
被膜を破って周囲の脂肪組織へ浸潤するもの、あるいは被膜へ浸潤するもの。
- III期 (5生率50-60%)
隣接臓器へ浸潤するもの。
- IV期 (5生率30-40%)
肋膜や心膜に腫瘍が種をまくように拡がって(播腫)いるもの、あるいはリンパ節転移や、他臓器への血行性転移があるもの。

まとめ

- 縦隔リンパ節(胸線を含む)に出現しやすい病変は、悪性リンパ腫、胸腺腫、癌転移である。
- 悪性リンパ腫では非ホジキンが約6割、ホジキンが約3割でホジキンの占める割合が高い。
- 非ホジキンではDLBCL、Tリンパ芽球性、濾胞性、MALT、形質細胞性が頻出する。
- DLBCLには二つの年齢群があり、ホジキンリンパ腫と近似している。
- ホジキンリンパ腫では結節硬化型が主体である。
- MALTリンパ腫は他部位のそれと異なる特徴を有する。
- 胸腺腫にはリンパ芽球性リンパ腫と誤診しやすい症例がある。